

YOUTH REPORT

VOL.

6

ナガサキ・ユース代表団2018 活動レポート

BE THE BRIDGE!



THE CHALLENGE: REPORT OF YOUTH MEMBERS



「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦



2018 MEMBERS

ナガサキ・ユース代表団 第6期生メンバー

工藤 恭綺 (長崎県立大学シーボルト校 国際情報学部 4年)、酒井 環 (長崎純心大学 人文学部 3年)、孫 明悦 (長崎県立大学 国際情報学研究科 2年)、中島 大樹 (長崎大学 多文化社会学部 3年) 永江 早紀 (長崎大学 多文化社会学部 3年)、原田 怜奈 (長崎大学 多文化社会学部 3年)、福井 敦巳 (長崎大学 多文化社会学部 3年)、三浦 大輝 (サセックス大学 環境開発学 留学予定) (2018年4月現在)

BEFORE DEPARTURE (出発前)

多角的に学ぶ 三浦 大輝

渡航前の1月から4月までNPT再検討会議第2回準備委員会への出席に向けた様々な準備活動を行いました。第一線で活躍されている専門家(国際政治・歴史・NGOの連携・マスメディアなど)をお招きし、多角的な視点から核問題を考え、知識を深めました。また、広島や長崎の被爆の歴史を改めて学んだほか、前年度のNPTでの各国の声明文を読み、核問題に対する立場を知りました。どの勉強会も刺激的で、現地での活動に活かすことができました。





ACTIVITIES IN GENEVA

(ジュネーブでの活動)



外交の最前線へ

孫 明悦

4月23日から5月4日まで2020年NPT再検討会議第2回準備委員会を傍聴しました。会議では核軍縮・核不拡散・原子力の平和利用について、各国政府から声明が述べられ、それぞれの発言から、国の立場を見ることができました。今回はロシア、アメリカ、シリア政府代表間の議論が白熱し、複雑な国際情勢とその緊張感が感じられました。

また、政府代表だけではなく、若者も含めたNGOの代表も意見を述べました。普段は直接関わることのできない方々と話すこともでき、本やニュースだけでは勉強できない内容を学ぶことができました。国際情勢を学び、実際に会議を傍聴したこと、世界と繋がるとても貴重な経験となりました。



対話を通して感じ、考える

中島 大樹



今回、私たちは15カ国の政府の方と対談し、主に安全保障政策や核兵器禁止条約についてお聞きしました。

対話を通して、核の傘の国と非核兵器国の姿勢が特に印象的でした。核の傘の国は核のリスクがある限り、核抑止に頼るといふ断固とした立場を取っていました。一方で、いくつかの非核兵器国はNPT自体にあまり意味を見出していないようでした。そのため、私の予想とは違い、核軍縮を強く推し進めるというより、核兵器

国の軍縮に対して失望感を抱いていたように感じました。

このような各国の声明文だけでは分からない部分を知ることで、核兵器廃絶に向けてなにが必要かを改めて考えることができました。



国連でプレゼンテーション!

永江 早紀

長崎から来た若者として、世界に発信したかったこと、それは『核兵器』を考えたときに、国境は関係ないということです。

私たちは、73年前に起きたことは広島や長崎、日本だけの歴史ではなく、地球の歴史として捉えることが大事なのではないかと考えました。今、この時も、私たちは約14,500発の核兵器が存在するこの地球で生活しています。あの日の出来事を、『日本が』ではなく『私たち人類が』その被害にあったのだという認識を、プレゼンテーションを通して発表しました。

当日は各国からNGOの方々や多くの若者にも来ていただき、多くの方に私たちの考えを伝えることができました。これからも、この想いを発信しつづけていきます!



長崎の若者のリアルな声を！ 工藤 恭綺



『若者から伝えられること』をテーマにショートフィルム（短編動画）を作成しました。長崎に住む10・20代をここにおける若者と定義し、彼らの核や核廃絶に対する想いや、核の非人道性に対する認識を来場者に伝え、共有し、そして考えてもらいたいという趣旨がこの動画に込められています。現在世界に存在する核兵器数をBB弾で視聴覚的に体感できるように工夫したり、被爆者の方の想いを組み入れました。

当日は、政府関係者や他国からの学生など多くの方々にご来場いただき、「長崎の若者でも核廃絶が難しいという意見があるとは予想していなかった」「被爆者の方のメッセージを聞いて、核の恐ろしさを改めて感じた」などの様々な声を拾うことができました。また、上映当日は来場者からのフィードバックを用いたアート作品も作成しました。



作成したアート作品「希望の木」



国際機関に学ぶ！ 国を越えた平和の構築

原田 怜奈



渡航中、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、ICRC（赤十字国際委員会）、WHO（世界保健機関）の3つの国際機関を訪問し、それぞれ教育と平和、医療と人道、保険と人権の関係について学びました。

印象的だったのは、彼らが行っている『国』の政治に囚われない、『個人』に焦点を置いた活動です。たとえばUNESCOでは、平和教育を『人の心の中に平和の砦を築く』こととし、国策に偏らない教育を目指していると伺いました。ひとり一人、個人で平和を築くこと。私は、これがUNESCOの考える平和だと考えました。

国策や国益だけで議論される核兵器問題も『個人』に注目すると、その非人道性や人権侵害の歴史がよく分かります。国際機関で学んだ『国境をこえた平和』を、核兵器廃絶を訴える上でも活かしていきたいです。



WHOの外観

平和教育の出前授業海外実践!

～ジュネーブ編～

酒井 環

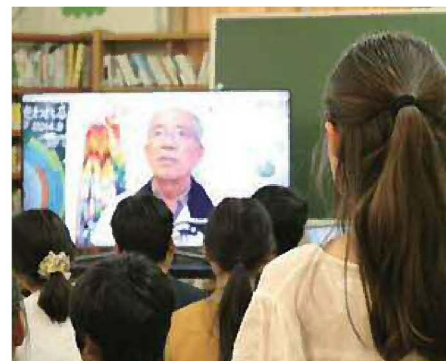


4月25日、28日にジュネーブ日本語補習学校にて、(平和教育の出前)授業を行いました。子どもたちが、73年前の被爆の実相や現代の核問題を知り、考えることに照準を置き授業を構成しました。

“73年前の出来事は、自分たちとどう関係しているのかな?”

という質問をした際、「自分のおばあちゃんが戦争で辛い思いをしたから私にも関係があると思う」や「お父さんが国連で武器に関する仕事をしてるから関係があると思う」などの答えをもらいました。授業を通して、子どもたちは核兵器問題を他人事ではなく、自分事だと感じているようでした。

今回の授業実践で、ジュネーブに暮らす子どもたちだからこそその考えを聞くことができました。真剣に考える子どもたちの姿に、私たち自身が刺激を受け、とても実りある時間となりました。



国境を超えていく若者の想い

福井 敦巳



会議には各国から多くの学生が参加していました。7つの団体の協力の下、会議の中で若者代表として声明文を発表しました。

最も印象に残ったことは、『ヒバクシャの想いが世界に共有されている』ということです。異なる文化や価値観を持つ学生との議論の中で、「ヒバクシャの想いを組み入れたい」という声、核兵器に安全をゆだねていることへの不安、一向に進まない核廃絶に対する苛立ちなど、被爆者や核兵器に対する世界の若者の想いを感じました。

このように、声明文の作成を通して、『原爆の記憶』を広島や長崎にとどめるのではなく、国境を超えて『人類の記憶』にすることが大切だと感じました。国境を越えて、核廃絶への想いを共有する架け橋になっていきたいと思います!



AFTER THE TRIP (帰国後)

それぞれの想いをツナグ

三浦 大輝

帰国後、私たちは『多くの人への経験の共有する』を念頭に活動しています。活動報告会をはじめ、図書館での写真展の開催や全国の教育機関への出前講座を行っています。他にも原爆資料館でのアート作品の展示や会議期間中に行ったプレゼンの国内実施など、経験を形として残したり、多くの人に伝えたりする活動を実施しています。私たちがジュネーブで、何を見て何を感じたのか。それらの経験を共有する中で、より多くの方の核兵器問題への関心を高めていきます!



7 QUESTIONS

ナガサキ・ユース代表团 に関する7つの質問

Q1.

ナガサキ・ユース代表团って何？

A. 長崎県、長崎市、長崎大学の3者が構成する『核兵器廃絶長崎連絡協議会』(PCU-NC)が主催する人材育成プロジェクトです。2013年に第1期生の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核や平和の問題を実践的に学び、この分野で活躍する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることをめざしています。

2018年度は、公募で選ばれた8名の長崎の大学生及び大学院生がジュネーブの国連欧州本部で開催された『2020年核不拡散条約(NPT)再検討会議第2回準備委員会』(右ページ囲み参照)への参加を中心に、様々な活動を行いました。

Q2.

誰が応募できるの？

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・院生、および同程度の年齢の若者です(18～25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間が終了した後もなんらかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るための勉強会や、企画、準備のためのミーティングに原則参加可能であることが求められます。

Q3.

費用は誰が負担するの？

A. 活動にかかる費用の一部を核兵器廃絶長崎連絡協議会が活動支援金として拠出します。2013年～18年の場合は、国際会議への参加にかかる旅費・滞在費として、一人あたり一律20万円が支給されました。不足分が出た場合は個人負担となります。

Q4.

誰がメンバーを選ぶの？

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は英語による面接です。長崎大学及びレクナの教員だけではなく、他大学の教員・ネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。



Q5.

核問題を専門的に勉強していなくても大丈夫?

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の教員に加え、学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。第6期生の場合、選考からジュネーブ出発までの間に、10回以上の勉強会と、数回の集中講義を受講しました。

Q7.

帰国後の予定は?

A. 長崎県、長崎市、長崎大学及び一般市民の方への活動と成果の報告を行った後は、8月末の任期満了まで、一連の活動を通じて得た知識や国内外の人々とのネットワークを活かし、全国での平和教育の出前などの活動を展開していきます。

任期満了後の活動は『ナガサキ・ユース代表団』メンバーとしての義務ではありませんが、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で核問題にかかわっていくことが奨励されます。実際、ユースメンバーに対しては、一年を通して交流や講演、取材の依頼が多数舞い込みます。また、核兵器廃絶長崎連絡協議会や RECNA が主催する核問題のセミナーやシンポジウム、様々なイベントに参加することで、さらに知識を増やし、経験を積んでいくことが可能です。



WHO WE ARE

Q6.

現地の活動内容は?

A. 大原則は、『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。第6期生が参加した NPT 再検討会議準備委員会には、各国政府代表だけでなく、世界各地から国際機関や NGO の関係者、専門家、大学生などの若者世代が多数集まり、政府の会議と並行して毎日さまざまな会議やワークショップなどを開催しました。ユース代表団のメンバーは、それらに参加するだけでなく、国連内の会議室を使って自主ワークショップを実施しました。各国の外交官との意見交換や国際機関や日本語補習校への訪問なども行いました。そうした活動は、SNS を通じてリアルタイムに情報発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルの現地活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

『2020年NPT再検討会議 第2回準備委員会』って何?

1970年に発効した『核不拡散条約(NPT)』は、その名前の通り、核兵器保有国が増えることを防ぐために作られた条約です。条約締約国は191か国(2003年に脱退表明した北朝鮮を含む)で、インド、パキスタン、イスラエルの3か国は加入を拒否しています。

NPTでは、米、口、英、仏、中の5カ国を『核兵器国』、それ以外を『非核兵器国』と定め、前者には核軍縮に向けた交渉を誠実に行うことを求め、後者には核兵器の開発や取得を禁じています。また、条約締約国には『原子力の平和利用』(原子力発電など)の権利が認められています。

条約で定められた義務がきちんと守られているかを検討するため、5年ごとに開かれる会議が『再検討会議』です。次回2020年の再検討会議に向けて、2017年から3回の準備委員会が開かれ、各国政府代表が意見を交わします。来年2019年はニューヨークで3回目の準備委員会が行われます。

OG & OB VOICE

4期生

白波 宏野

(長崎大学多文化社会学部 4年)

ユースの活動を通して沢山のひとと知り合うことができました。『核兵器』や『原爆』、『戦争』といった問題に対し何らかの強い思いを抱く人々との関わりの中で、自分の意見をもつということは、私にはとても難しいことでした。しかし、今になって思い返せば、ユースの活動を通じていろいろな考え方や価値観と接したこと、そこで感じた違和感や疑問が、自然と自分の意見となり、また次の行動のきっかけにもなっていたように思います。活動中は目まぐるしくあっという間に時間が過ぎてしまいましたが、振り返れば、この活動をしていなければ決して巡り合うことはない、時には奇抜な出会いの数々がナガサキ・ユースの何よりの魅力だと感じています。



4期生

松本 健太郎

(小学校教諭)

ユース 4 期で初めて発足した『Peace Caravan』。この活動では、主に核兵器の脅威や現状を日本全国の子どもたちに伝えていくための授業を行いました。

毎回、授業開始直前までメンバーと話し合い授業に臨むも、どれほどの子どもが核の脅威を自分事として捉えられていたか、疑問が残らないことはありませんでした。『伝える』ということは、自分の思いを言葉に乗せること。ヒバクシャの方々は、私たちに全身全霊で体験を語って下さったからこそ、聴く者の心を揺り動かしていたのだと、感じました。戦後 73 年。被爆者なき世界が目前に迫っています。私は今、教師として、先人の思いを次の世代に伝え、その子どもたちが更に次の世代に伝えていけるようにする責任を感じながら、仕事と向き合っています。



5期生

立石 丞

(長崎大学大学院多文化社会学研究科)

もし、皆さんの胸の内に『自分を成長させたい』という思いがあるならば、ナガサキ・ユース代表団はおススメです。核問題を扱うユースでは、長崎での原爆の実相はもちろん、リアルタイムの国際情勢についても自分たちの考えを深めていきます。様々なことを吸収していくうちに、長崎から世界へ視野が広がったことが実感できるでしょう。

さらに、自分たちの思いを発信するチャンスもたくさんあることから、『何かやってみたい』という気持ちで“形”にしていけます。一緒に行動してくれるメンバーとそこで作り上げたものは忘れられません。

みなさんも、未来について夢を語り、その実現に向けて共に動いていけるような仲間と自分の可能性を広げてみませんか。



5期生

光岡 華子

(長崎大学教育学部 4年)

長崎出身でも高校までに特別な経験があるわけでもなく、大学 3 年という決して早いスタートでもありませんでした。それでも私は今『平和活動家』になりたいという強い思いを持っています。共に頑張る仲間、カッコいい大人達、本当の学び、それをアウトプットできる機会と出会えたのは、間違いなくナガサキ・ユース代表団という道を選択したからです。「行動することでしか何かを変えることはできないけど、行動することで何かを変えることができます」「できるかできないか」よりも、あなたがそれを“やりたいかどうか”。見えてる世界だけが全てでないということを存分に感じられる場所が待っています。チャンスが目の前にある今、あなたは何かをやりたいですか？



■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council

RECNA
長崎大学核兵器廃絶研究センター

「ナガサキ・ユース代表団」公式 Facebook ページ
<https://www.facebook.com/nagasakiyouth>

facebook

ナガサキ・ユース代表団

■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町 1-14

(長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 内)

TEL : 095-819-2252 / FAX : 095-819-2165

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/pcu/>

